

最古のフランス語文法書、 *Donait françois* について

武 井 由 紀

0. はじめに

フランス語の文法史上、1530年にイギリス人 John Palsgrave によって出版された *Lesclaircissement de la langue françoise* は、フランス語の書名であるものの内容は英語で書き下ろされた、最初の大きなフランス語文法書と言われるものである。また、Jacques Dubois(Sylvius)による *In linguam Gallicam Isagoge*¹ は、ラテン語で書かれたものではあるがフランス人によって最初に記されたフランス語文法書と位置づけられているものであり、1531年、後に仏羅辞典を刊行した Robert Etienne によってパリで印刷された。確かに前者は最初のもともった文法書として、後者は最初のフランス人による文法書としてその価値が認められるものではあるが、純粋な意味において最も古いフランス語の文法書に該当するものではない。

現存する最古のフランス語の文法書が *Donait françois* (以下、D.F.と略す)であることは後に言及する幾つかの文献からも確認されるが、Pierre Swiggers (1985) に所収される全原文の校訂版の刊行によって、D.F.がテキストの形でより身近なものとなった。一方で、日本のフランス語およびフランス語史研究においては、D.F.に対してこれまで十分な関心が払われてきたとは言いがたく、翻訳物以外でD.F.についての記述を見出すのは非常に困難である。そこで本稿では P. Swiggers の校訂本文を活用し、当時のフランス語について若干の考察を述べつつ、これまでの研究を踏まえてD.F.の全容を詳述する。

1. 最古の文法書と称される理由

Donait françois はオックスフォード大学オール・ソウルズ校、コドリントン図書館に所蔵されている写本²であり、Johan Barton³のために数人の学識者が書いたものである。そもそも D.F. の「Donait」とは、ローマの文法学者アエリウス・ドナトゥス *Ælius Donatus* の名を起源とする「文法書」を意味するものであり、従って *Donait françois* とは「フランス語の文法書」と解釈されるものである。これはドナトゥスが4世紀後半頃に著した二大文法書、『小文法学』*Ars minor* と『大文法学』*Ars maior* が、「中世を通じて広く使用され、中英語では彼の名に由来するドナト *donat* あるいはドネト *donet* という語が一般に〈文法〉または〈教科書〉の意味で用いられた⁴」ことから裏付けられる。加えてドナトゥスの文法書が「古典古代末期から近代初頭まで、おおよそ1000年の間ラテン語学習の基本であり、文法理論や言語観の礎であった⁵」こと、それらが多数の諸言語の文法学に大きな影響を及ぼしたことはこれまでも指摘されている通りである⁶。

さて、Ferdinand Brunot (1996 : 393) は、海外、特にイギリスにおけるフランス語事情を論じる中で、13世紀にはラテン語・フランス語の語彙集が、14世紀初頭には *Gautier de Biblessworth* によってかなりの数の単語集が、更には14世紀末までに最も古いものとしては『ことばの作法』*Manière de langage* が代表するような旅行者のための会話集が、いずれもイギリスで作成されたと述べている。その上で D.F. について、“Celui de tous ces ouvrages qui ressemble le mieux à une grammaire est le *Donait françois* de Jean Barton (vers 1400, avant 1409)” [これらすべての書物の中で最も文法書の体をなしているものは Jean Barton の *Donait françois* (1400年頃、1409年以前) である]⁷ と言及している。従って、D.F. の刊行前後にもフランス語にまつわる文献が確認できるものの、最初に文法書と呼ぶに相応しいものとして D.F. を認識していることが理解できる。

F. Brunot は上記の事柄に関連してイギリスで著された先の語彙集や単語集にフランス語の辞書編纂の起源があるとも指摘しているが、イギリス

でのフランス語およびフランス語文法の研究がこれほど積極的に行われていた背景には、当然のことながら歴史的経緯が深くかかわっている。F. Brunot (1996 : 384-392)の記述を基に言語的側面に着目してみると、次のように概観できる。11世紀初頭にノルマンディ公ウィリアム征服王によるイギリス征服が成し遂げられると、イギリス国内にてノルマン・フランス語が優位に立ち始めると共にその知識がこれまで以上に求められるようになった。しかし土着言語との融合を経て12世紀中には独特のノルマン・フランス語変種が生まれると、それが当時の北仏地方で話されていたフランス語とは異なることからフランス人から嘲弄を受けた⁸。それを認識していたイギリス人は13世紀にはフランス生まれの教師を求めるなどして、イギリス人が陥り易い、特に綴り、発音、構文面での間違いを改めようと努めたのである。これが先述したイギリスにおけるフランス語研究につながる理由である。その後は、13世紀初頭にフランス王フィリップ2世がノルマンディ地方を没収すると、英仏関係が途絶え、イギリスでのフランス語の影響力が徐々に弱まっていくものの、フランス語が上流階級以外の人々にまで浸透していたため、百年戦争の開始を経て、14世紀半ばにイギリス王エドワード3世が議会でフランス語の使用を禁ずる頃まで、イギリスにおけるフランス語の影響力は大きなものであった。

D.F.にかかわる記述はWalther Wartburg (1950 : 115)にも見出され、“Vers 1400 enfin Jean Barton donne le ‘Donait François’.” [1400年頃、ついにJean BartonがDonait Françoisを出す]と述べているが、W. WartburgがF. Brunotの1913年版⁹を参照していることを考慮すれば、表現内容はF. Brunotに準じていると言える。しかし続く一文の、“Donc la grammaire française n’est pas née en France.” [従ってフランス語の文法書はフランスで生まれたのではない]という表現からは、W. WartburgがD.F.を最初のフランス語文法書として認めている姿勢が読み取れる。

フランス語の概説書を類型学的視点から捉えたSerge Lusignan (1987 : 96)によれば、最初に現れる概説書の類は13世紀にイギリスで作られた

先述のフランス語の語彙集や単語集のような、広く“nominalia¹⁰⁾”という名で示される文献であり、続いて発音についての概説書—最初のものとしては*Tractatus orthographie*—が13世紀末に現れたという。14世紀後半からは教育的な概説書が開花したと述べた上で、単なる正書法に留まらない*Orthographia gallica*についても言及しているが¹¹⁾、“Ce n’est qu’au tout début du XV^e siècle qu’on systématise réellement la grammaire du français avec le *Donait françois* de John Barton.”〔14世紀初頭になってはじめて John Barton の *Donait françois* によってフランス語の文法が実質的に体系化されるのである〕と明言している。

以上から、D.F.が最古のフランス語文法書であるとする妥当性は十分証明されると考える。

2. D.F.の特徴

2.1. 全体的特徴、「Introduction」、[Classement des lettres]

D.F.の原文を恐らく最初に学術的な紙面で発表したのは、Edmund Stengel (1879)であると推測できる。その理由は、フランス語史を論じる上で F. Brunot を始めとする研究者がこれを参照元としているからである。しかし、E. Stengel 自身もそれを明記し、Jean-Claude Chevalier、P. Swiggers らもそれを指摘しているように、E. Stengel に所収されている写本は原本通りのものではなく、更に R. Brede という学生によって書き写されたものである¹²⁾。E. Stengel の写本と P. Swiggers の写本の厳密な比較は本稿の目的から逸れるためここでは述べないが、少なくとも後者は明確な転写規定¹³⁾に基づく校訂版であるという理由から、本稿での校訂原文はいずれも P. Swiggers (1985) から引用する。

D.F.の特徴を述べるに当たり、先ずその全体像を把握することが有益であると思われるため、P. Swiggers (1985: 237) が内容に基づいて作成した概要一覧を示す。次が写本に対応する該当箇所の表記を省いた、その具体的項目である。

Introduction

(Phonétique :) Classement des lettres

(Morphologie :) Les accidents des mots

espèces de mots

figures de mots

le nombre

la personne

le genre

la qualité

le cas

degrés de comparaison

le mode

le temps

le genre

(Morphologie :) Les parties du discours

introduction

« supposition » des noms

le nom

le pronom

le verbe

この一覧から全体が四つの部分—「Introduction」、「Classement des lettres」、「Les accidents des mots」、「Les parties du discours」—に大別されていることが分かるが、これはP. Swiggersが独自に設けたというよりも、むしろD.F.の作成者自らがそれぞれを一つの章という認識の下で構成している可能性が高い。理由は、原文において「Classement des lettres」の後、「Les accidents des mots」へ続く箇所に、“après le chapitre des lettres”という表現が用いられているからであるが、後に引用する原文で実際に確認できる¹⁴。

一覧の項目に着目すると、二つの全体的特徴を読み取ることができる。

一つはD.F.の構成がいわゆる発音、綴り、それに続いて単語、更により大きな形態について、意味のおよび構文的視点から徐々に内容が展開されている点である。もう一つはD.F.がラテン語教典の影響を受けている点である。先の項目名には原文に含まれる語が含まれているのだが、「accident属性」や「parties du discours 品詞」といった言葉の捉え方は、D.F.の名の由来でもあるドナトゥス文法に代表される、言語構成要素であると同時に文法的分類項目でもある。「parties du discours 品詞」が8つに分類されていること、更に後述することでもあるが、D.F.では全体を通じて問答形式が採られていることについても同様のことが言える。また、「espèce」「figure」とする語形成の捉え方は6世紀頃のラテン語文法書として知られるプリスキアヌスの『文法学・文法学教程』*Institutiones grammaticae*に見出されるものである。

実はこれらと関連してD.F.が模範としたであろう文法書について幾つか異なる主張がある。J.-C. Chevalierはドナトゥス文法、プリスキアヌスの『文法学・文法学教程』、12世紀末にAlexandre de Villedieu(de Villa Dei)が著した*Doctrinale*のいずれも、D.F.の制作者達が参照していたと論じ、S. Lusignanは、プリスキアヌスの文法教程よりはドナトゥス文法により帰するものであると指摘し、またP. Swiggersはドナトゥス文法の『小文法学』をモデルにして著されたものだとはっきりと述べている¹⁵。現時点ではここに挙げたラテン語文法書の理解が不十分であるため、ここでそれぞれの主張の真偽を判断することは到底できない。しかし、どの書物も名著であり広く普及していたことからいずれも参照元になっている可能性と、時系列的にはドナトゥス文法、プリスキアヌスの先述書、*Doctrinale*の順となる事実を考慮すると、本稿では、いずれのラテン語文法書も模範となる影響を与えた可能性が高く、中でも三点の内でも最も早く刊行されたドナトゥス文法に依拠するものが多いと考えておく。

これより上記の項目に基づいてD.F.の詳細を述べていくが、最初の「Introduction」では、既述の通りJohan Bartonのために数人の学識者が

D.F.を編んだことが述べられているが、むしろ Johan Barton が出資して彼らに D.F. の作成を委託したことが明確に述べられている。

A le honneur de Dieu *et* de sa tres douce miere et toutz les saintez de paradis, je Johan Barton, escolier de Paris, nee et nourie toutez voiez d’Engleterre en la conté de Cestre, j’ey baillé aus avant diz Anglois un Donait françois pur les briefment *entreduyr* en la droit language du Paris *et* de país la d’entour, laquelle language en Engleterre on appelle douce France. Et cest Donait je le fis la fair a mes despenses *et* tres grande peine par pluseurs bons clerks du langage avant dite. (P. Swiggers, 1985, p. 240)

なお P. Swiggers は、Johan Barton の名が、D.F. 同様、コドリントン図書館に所蔵されている *Confutatio Lollardorum* の写本にも唯一記されていることが確認できることから、恐らくその著者であり医者である人物と同一視できると推測している¹⁶。

「Classement des lettres」ではまず音素について、5つの母音と15の子音に言及した上で、先に母音を取り上げてその発音方法を詳しく論じている。原文からは、確かに P. Swiggers も述べている通り¹⁷、いわゆる調音点までも識別した説明がなされている。

Quantez lettres est il ? — Vint. — Quelles ? — Cinq voielx et quinze consonantez. — Quelx sont les voielx *et* ou seront ils sonnés ? — Le premier vouyel est « a », *et* serra sonné en la poitrine. Le seconde est « e », *et* serra sonné en la gorge. Le tiers est « i », *et* serra sonné entre les joues. Le quart est « o », *et* serra sonné au palat de la bouche. Le quint est « u », *et* serra sonné entre les levres. Et toutes les autres lettres sont appelléz consonantz. (*ibid.*, p. 240)

子音については「l », « m », « n », « r », « s », « x 」という六つの“semivouyelx”と、「b », « c », « d », « f », « g », « h », « p », « q », « t 」という九つの“mutes”を分別し、前者はこれらの前に母音があること、後者はこれ

らの後に母音があることでそれぞれの子音が認識されていることが理解できる。

Quantez manieres est il de consonantz ? — Deux. — Quelx ? — Semivouyel ou mute, qar sicome chescun vouyel comence de lui mesmes et fin a lui mesmes sicome « l », « m », et doncques il est appellé un semivouyel ; ou il comence de lui mesmes et fine en un vouyel sicome « b », « c », et doncques il est appellé une mute. — Quantez semivouyelx sont ils doncques ? — Six. — Qelx ? — « l », « m », « n », « r », « s », « x ». — Et quantez mutez sont ils ? — Neuf. — Quelx ? — « b », « c », « d », « f », « g », « h », « p », « q », « t », mais « h » n'est pas lettre, mes elle est un signe de alaine ; « y », « z » sont lettres gregoisez. (*ibid.*, p. 240-241)

この後、音と綴り字の関係に着目した考察がなされているが、全体としては一つの単語を観察対象とし、どの位置に何が、つまり語頭、語中、語末に、母音あるいは子音が現れるとどのような現象が起きるかを分析的に述べ、例えば、母音で終わる語に続いて母音で始まる語が来る場合、最初の語末の母音が省略されることを既に指摘している。

2.2. 「Les accidents des mots」

「Les accidents des mots」では、まず「espèces de mots」「figures de mots」として語形成が論じられている。“especies”とは、ある語が一次的ないしは本源的であるかそれとも派生的であるかを問題にしたもので、“primitive”と“dirivative”が下位分類化され、「un jour」、「un maille」等が“primitive”として、「une journee」、「une maillee」がその“dirivative”であるとされる。“figures”は単一語であるか合成語であるかを問題にするものだが、“simple”、“compost”、“decompost”の三区分に基づいて、具体的には順に「fait」、「parfait」、「parfaitement」という例と共に形態論的な観点から構成の違いが述べられている。

Après le chapitre des *lettres* il nous fault dire des accidens *primierement* pour ce. *Quant* especes sont ils des mos ? — Deux. — Quelles ? — La *primitive* et la *dirivative*. Qar quant un mot ne vient que de lui mesmes, doncques nous l'appellons de la *primitive* espece, sicome « un jour », « un maille », « un denier », « un blanc » ; mais *quant* un mot descent de un autre, doncques nous l'appellons de la *dirivative* espece, sicome « une journee », « une maillee », « une denierree », « une blanchee ». — *Quantez* figures est-il des mos ? — Trois. — Quelles ? — La simple *et* la *compost et* la *decompost*. Qar quant un mot ne peut estre devisé en deux mos et chescun par soy entendible, doncques nous le appellons de la simple figure, sicome cest mot « fait » ; mais *quant* un mot peut estre devisé en deux mos *et* chescun *par* soy entendible, doncques nous l'appellons de la *composte* figure, sicome cest mot « parfait » ; et *quant* un mot descent d'un autre qui est *compost*, doncques nous l'appellons de la *decomposte* figure, sicome cest mot « parfaitement ». (*ibid.*, p. 242)

続く「le nombre」では単数と複数を区別し、D.F.が作成された時点で語末に付属する“s”が複数の指標として認識されていたことが分かる。

Quantez nombrez sont ils ? — Deux. — Quelx ? — Le *singuler* et le *pulier*. — Que est le *singuler* ? — Cestuy que *parle* d'une chose seulement, sicome « un home », « une femme » ; mais le *puliere* est cil que *parle* des pluseurs choses ensemble, sicome « les homes », « les femmes ». Cy endroit il fault sçavoir que ceste mot en françois, pour la *graigneur partie*, que est *singulier et* aussi *pulier* se il y a un « s » plus a bout, sicome « home, homes », « femme, femmes ». (*ibid.*, p. 242-243)

「la personne」では1人称、2人称、3人称に分類し、当時の具体例として単数形にはそれぞれ「je」、「tu」、「cil」、複数形には「nous」、「vous」、「ceulx」が挙げられている。

Quantez personnes est il ? — Trois. — Quelles ? — La primier, la deusiesme, la troisisme, sicome « je », « tu », « cil » en singular, « nous », « vous », « ceulx » en pulier. (*ibid.*, p. 243)

また「le genre」については、「le masculin」、「le femenyne」、「le neutre」、「le comun de deux」、「le comun de trois」という5種類の性が識別され、

Quantez geners est il ? — Cinq. — Quelx ? — Le masculin, le femenyne, le neutre, le comun de deux, le comun de trois. (*ibid.*, p. 243)

「la qualité」では「Londres」、「Jehan」等を例に“propre noun”として表される固有名詞と、「une citee」、「un fluve」等を例に“nom appellatif”で示される普通名詞ないし一般名詞とを区別している。

La qualité des nouns en quoy est elle devisé ? — En deux. — Coment ? — Ou le nom de quelle que chose que tu veulx, quant il fust primièrement trouvé, fust ordiné a signifier une chose seulement, *et* pour ce est il appellé un propre noun, sicome « Londres », « Tamis », « Jehan », « Eleyne » ; ou le nom de quelle que chose que tu veulx, quant il fust premierement trouvé, fust ordeiné a signifier en comun toutez de sa nature especiale, *et* pour ce les gramoriens le appellent un nom appellatif, sicome « une citee », « un fluve », « un home », « une femme ». (*ibid.*, p. 244)

次の「le cas」ではまず6種の格、いわゆる「nominatif主格（名格）」、「génitif属格」、「datif与格」、「accusatif対格」、「vocatif呼格」、「ablatif奪格」が挙げられているが、「le」は主格（名格）あるいは対格を、「du」は属格あるいは奪格を表すとされる。また、「au」は与格の指標であり、呼格には指標が見られないと説明している。

Quantez cases est il ? — Six. — Quelx ? — Nominatif, genitif, datif, accusatif, vocatif, ablatif, *et* ils sont cognuz par leurs signez. — Qui sont ils ? — Ces trois : « le », « du », « au » : « le » est signe du nominatif ou du accusatif ; « du » est signe de le genitif ou de l'ablatif,

et « au » est signe du datif ; mais le vocatif ne a point de signe, qar chescun mot que est appellé d'un altre est vocatif case, sicome « mon amy, va te en », « meistre, ensaigne nous ». (*ibid.*, p. 244)

この格の記述についてJ.-C. Chevalier (2006 : 141) は、D.F.の中でドナトゥス文法、および先述したプリスキアヌスの文法書や*Doctrinale*に見出される文法理論に通ずる要素の一つとして、次のような興味深い指摘をしている。“La morphologie est un signe distinctif des concepts, signe dont on peut se passer, *par opposition*, comme il est montré pour le vocatif (degré zéro).”〔形態は概念を弁別する一つの記号であり、呼格（ゼロ指標、無標）に示されているように、「対比」によって得ることのできる記号である〕。確かに、形態の異なりによって示される意味内容を区別して取り出すという手法は、この呼格に限らず、これまでの、そしてこの先で述べる他の項目においても十分認められる点である。また、これがラテン語文法学の影響を受けているとしても、形態の相違が意味の弁別を担う一つの要素として重要な役割を果たしていると考えことは現代においても変わらない事実である。

続く部分では、先述した一つの形態が二つの指標になり得る格の内、「le」と「du」の格をそれぞれどのように断定するかを説明している。主格（名格）か対格を表す「le」の場合、それを伴う語が「する」や「される」場合、つまりそのような意味を表せば、それは主格（名格）であるという。例文に基づけば、文構造として能動文と受動文に着目した上で、その動作主と被動作主にあたる語を主格（名格）と見なしていると換言できそうである。これに対し「le」を伴う語が、伝達者に照らして何らかの行為を被れば対格を示すことになる。遠回しな説明ではあるが、原文がそれを証明しているように、「le」がまだ主格の性質を帯びていた当時の言語状況を考えて、文構造の中で説明の糸口を見出そうとしている様子がうかがえる。

実はこの点について、E. Stengelに掲載されたD.F.原文を参照しているS. Lusignan(1987 : 114)は、“« Le » indique le nominatif quand le mot devant lequel il se trouve fait ou subit, c'est-à-dire qu'il est agent de l'action exprimée par le verbe ;

s'il reçoit cette action, il est à l'accusatif. Puis il donne quelques exemples comme *le meistre nous ayme* ou *j'ayme le meistre*.”〔« le »を前に伴う語が行うか被る時、つまりそれが動詞によって表される動作主の時、「le」は主格（名格）であり、もし「le」を前に伴う語がその行為を受けるなら、それは対格である。続けて、彼（著者）は *le meistre nous ayme* や *j'ayme le meistre* という例を挙げている〕と述べている。しかし、以下の原文と比べると、S. Lusignan が挙げている例文では受動文—*le maistre est amé de nous*—が省かれており、またそのためか上述のように「le」を前に伴う語が…動詞によって表される動作主の時、「le」は主格（名格）」という表現に留まっている。受動文の「主格」は必ずしもその文に含まれる動詞によって表される「動作主」にはならないことを考慮すると、解釈文としては幾分言葉が不足している印象を抱くものである。なお、E. Stengelに掲載されたD.F.原文の中にも後で引用するものと同じ例文が確認できる¹⁸。

この主格（名格）と対格について、特に対格になる場合を示すD.F.の原文を引用しながら、J.-C. Chevalier (2006 : 141) は先程と同様の着眼点から、次のように言及している。“L'ordre est le second signe distinctif : le nominatif va devant, le prédicat derrière ... le nominatif est ce dont on va nous apprendre quelque chose et est donc premier, l'accusatif ce sur quoi passe l'action intliquée par le verbe et qui est donc second par rapport à l'action.”〔語順は二つ目の弁別記号であり、主格（名格）が先に来て、述語がその後に来る。…主格（名格）はそこから何かを得るものであり、それが故に最初に生起するのであって、対格はそこに動詞によって指し示された行為が及ぶものであるからこそ、行為に対して二番目に来るのである〕、と。このJ.-C. Chevalierによる考察は、語順の重要性を示すと同時に、古フランス語にあった二格体系が消滅した後の、あるいはその要因とも考えられている語順が「主語—動詞—補語」へと次第に固定化されていった一つの理由を的確に論証するものであると考えられる。従って、その論拠となるD.F.の格についての記述自体も、その変遷の一過程を捉える上で十分注視される価値を有すると

考えられる。

もう一つの問題となる格、属格あるいは奪格を示す「*du*」については、「*du*」を伴う語の前にある語が名詞であれば属格を表し、「*du*」を伴う語の前にある語が動詞や分詞であれば奪格を表すという。以上、解説が長くなっただが原文は以下の通りである。

— Ditez quant ce seigne « *le* » est seigne du *nominatif case et* quant de le *accusatif*. — Quant le mot devant le quel cest seigne « *le* » vient, fait ou seuffre, doncques se mesmes mot *nominatif case*, sicome « le meistre nous ayme », « le maistre est amé de nous » ; mais quant le mot devant le quel cest seigne « *le* » vient, receipt ascun fait devant alant, doncques ce mot est *accusatif case*, sicome « je ayme le maistre ». Et ce mot que signifie fair ou seuffre est appellé un verbe, sicome « je ayme », « je suys amé ». — Ditez quant cest seigne « *du* » est seigne de le *genitif case et* quant de l'ablatif *case*. Quant le mot devant lequel cest seigne « *du* » vient, ensuyt un nom, doncques ce mesmes mot *serra genitif case*, sicome « je ayme le filz du maistre » ; mais quant le mot devant le quel cest seigne « *du* » vient, ensuyt un verbe ou un *participle*, doncques ce mesmes mot *serra ablatif case*, sicome « je suis ensaigné du maistre ». (*ibid.*, p. 244)

D.F.の項目一覧に戻ると、「*le cas*」の次は「*degrés de comparaison*」である。ここでは3つの比較レベル—“*positif*”、“*comparatif*”、“*suppletif*”—が取り出されている。例えばそれぞれ順に「*bon*」、「*plus bon*」、「*tres bon*」が実例として挙げられているが、より優れた“*suppletif*”には「*tres plus bon*」といった用例も認められている。

Quantz *degrés de comparaison* est il ? — Trois. — Quelx ? — Le *positif*, sicome « *bon* », « *mauveis* », « *bel* », « *lait* », « *haut* », « *bas* », *et* ainsi des aultres ; le *comparatif*, sicome « *plus bon* », « *plus mauveis* », « *plus hault* », « *plus bas* », *et* ainsi des aultres ; le *suppletif*, sicome

« tres bon », « tres mauvais », et ainsi des autres. Ci endroit il faut sçavoir que le comparatif en françois est le mesmes mot que est son positif, avecque cest mot « plus », sicome « plus bon », « plus mauveis ». Et le supellatif est le mesmes mot que est son positif avec cest mot « tres », sicome « tres bon », « tres mauveis » ; mais quant on veult fair un excellent supellatif, donque l'en adjoint cest mot « plus » avec cest mot « tres » ou le positif, sicome « tres plus bon », « tres plus mauveis ». (*ibid.*, p. 245)

続く「le mode」では、「indicatif直説法」、「impératif命令法」、「optatif希求法」、「conjunctif接続法」、「infinitif不定法」という5つの叙法の別が述べられ、

Quantz meufs est il ? — Cinq. — Quelx ? — Le indicatif, ... le imperatif, ... le optatif, ... le conjunctif, ... le infinitif, (*ibid.*, p. 245)

「le temps」では三つの時制—現在、「pretert」と称されるいわゆる（汎）過去、未来—に加え、引用は省略するが、「pretert」を更に“pretert imparfait”、“pretert parfait”、“pretert plus que parfait”に分類している。

Quans temps est il ? — Trois. — Quelx ? — Le temps qu'est maintenant *et* est appellé present, sicome « je ayme » ; le temps qu'est passé *et* est appellé le pretert, sicome « je aymey » ; le temps qu'est a venir *et* est appellé le future, sicome « je aymerey ». (*ibid.*, p. 245)

「Les accidents des mots」に含まれる最後の項目は「le genre」である。これは動詞の性を指すものであり、内容としてはいわゆる能動、受動、中動（中性）の概念についてその区分を述べたものであるが、このような動詞の捉え方もD.F.が模範としたドナトゥス文法に見出されるものである。

Quantz genres est il des verbes ? — Trois. — Qelx ? — Le actif, c'est a dire faisant, come « je ayme » ; le passif, c'est a dire seuffrant, come « je suys amé » ; le neutre, c'est a dire ne le un ne l'autre clerement, sicome « je dois ». (*ibid.*, p. 245-246)

2.3. 「Les parties du discours」

この部分の一覧を改めて挙げると次の通りである。

(Morphologie :) Les parties du discours

introduction

« supposition » des noms

le nom

le pronom

le verbe

ここでは、まず「introduction」の中で8種の品詞が分類されている。活用するものとして名詞、代名詞、動詞、不定詞が、活用しないものとして副詞、接続詞、前置詞、間投詞が識別されていることが分かる。

Quantez partiez est il de oraison ? — Huyt. — Quelles ? — Quatre que sont declinéz *et* quatre que ne se declinent mie. — Lequelles quatre sont que se declinent ? — Nom, *pronom*, verbe, *et* participe. — *Et* quelles sont les quatre que ne se declinent mie ? — Adverbe, conjunction, *preposicion*, *interjection*. (*ibid.*, p. 246)

これに続く4項目は「« supposition » des noms」、「le nom」、「le pronom」、「le verbe」であるが、D.F.では「le verbe」で終わっていることから、残る品詞についての詳しい内容を知る術は今のところない。

「« supposition » des noms」は他の学問領域にもかかわる内容であるため、現時点では中世の論理学に通ずると解釈できるような、「代示」あるいは「代表」と定義される概念 *suppositio* に結び付いた言葉の捉え方を表していると述べるに留める。その根拠はこの項目について P. Swigger (1984 : 186) が言及している次の一文にある。“*Sous l’influence de la logique médiévale, l’auteur du Donait francois signale que tout mot peut être pris matériellement (c’est-à-dire métalinguistiquement), quand il ne montre que sa voix — et dans ce cas il fonctionne comme un substantif indéclinable —, ou personnellement, quand il acquiert un sens dans le discours et qu’il renvoie à une réalité extra-linguistique*”

[中世論理学の影響を受け、*Donait francois*の著者はあらゆる言葉が物質的に（つまりメタ言語学的に）解釈され得ることを指し示しているのであって、言葉がその発声されたものしか表さない時、その場合は不変化の実詞として機能するのであり、あるいはまた、言葉が談話の中で意味を獲得する時、その言葉は超言語学的現実を指し示す]。その上で脚注においては、“le problème posé ici relève de l’étude de la *suppositio* des termes” [ここで問われている問題は「項辞」の「代表」に属するものである]とも述べている。

En quantz maniers peut un mot estre parler ? — En deux. — En quelx ? — En un manier, materialment, c’est a dire *quant* le mot ne mouste pas sa signification, mais sa voix seulement, sicome cest mot « ou » belcoup des entendemens ; et en un autre manier, *personellement*, c’est a dire *quant* un mot ne parle pas de sa voix seulement, mais de son entendement, sicome « ou alez vous » ? (*ibid.*, p. 246)

「le nom」についてはまず「名詞」と言われる品詞がどのようなものであるかという定義で始まり、詳しい説明が続いている。しかし要点はこの名詞の定義と、その定義が示す具体的な内容であると言えよう。D.F.における名詞の定義は、それ自身によってある物の名前を、あるいは他のものがかかわっているある物の名前を担っているすべての言葉である、とされる。

Comment cognoistrey je de celle *partie* de oraison qu’est appellé nom ? — Chescun mot que porte le nom de une chose *par* soy mesmes ou pendant d’un aultre est appellé nom. (*ibid.*, p. 246)

この定義によって示される具体的なものは、S. Lusignan (1987 : 113)が“ce que nous appelons le substantif et l’adjectif épithète sont ici regroupés dans la même catégorie du nom.” [実詞と付加形容詞と呼ばれるものがここでは同じ名詞のカテゴリーに分類されている]と的確に指摘する通り、いわゆる「実詞」と「付加形容詞」である。原文では単に“adjectifs”と表されているが、次の原文で確認できる通り、この“adjectifs”はそれだけで現れることができ

ず、常に実詞を必要とするものであると述べられていることから「付加形容詞」であることが導かれる。この記述は、D.F.が制作された当時、「付加形容詞」が「名詞」に含まれていたことを証明するものである。

Et pour quoy ditez vous « pendant d'un aultre » ? — Pour les noms que sont appellés adjectifs, que ne pouent pas estre par eulx, mais il leur fault tous jours ou estre aveque leurs substantifs ou les avoir entenduz sicome « bon », « bel ». (*ibid.*, p. 246)

続く「le pronom」の部分では、人称、格変化、数、そして性に応じて異なる代名詞の具体的な形態が例示され、それらがいわゆる人称代名詞、指示代名詞、所有代名詞の別として述べられている点が特徴的であると考えられる。また次の原文からは、指示代名詞と関連して“pronom relatif”として「il」が取り出されていることに加え、古典期より指示的特性を有することから強調する意味を表し得た「le」の存在がD.F.においても認識されていることが読み取れると同時に、それとは別に指示代名詞としてだけでなく“relatif”としての働きも担うと考える「le」を識別していることが分かる。

Derechief sçachéz que cest mot « il » est un pronom relatif, sicome « je ayme le meistre, qar il me a donné cause ». Mais cest mot « le » est un article, c'est a dire un seigne enforçant les autres mos, sicome « je ayme le meistre lequel me ayme ». Et ascun foiz cest mot « le » est un pronom demonstratif et infinit, sicome « je le ayme lequel me ayme » ; et ascun foiz relatif, sicome « le meistre vient et je le ayme », ou ainsi « le meistre vient ; le ayme tu point ? ». (*ibid.*, p. 247)

これは、中世を経て近代、現代のフランス語に至るまでの発展段階に位置する当時の言語状況を考慮すれば、決して納得できない内容ではない。このような代名詞の捉え方もまたラテン語の研究に倣ったものと言うJ.-C. Chevalier (2006 : 147-148) は、“L’auteur du Donait examine le sens de ces pronoms et le divise en démonstratifs et relatifs, vieux clivage qui correspond à la distinction

logique de ce qui est posé en soi et de ce qui est posé en relation.”〔Donaitの著者は代名詞の意味を吟味し、それを指示詞と関係詞という、それ自身に定められているものと関係に定められているものとの論理的な識別に一致する、古い区分に分けている〕と述べているが、その上で、“L’embryon de syntaxe est ici justifié par la logique.”〔統語論の萌芽が論理によってここに証明される〕と述べ、言語学的見地から鋭く洞察している。

最後の項目となる「le verbe」では、動詞とは時制を伴うが格は伴わない、行うあるいは被ることを意味する言葉であるという定義で始まり、

Coment cognoisterey je celle partie de oraison qu’on appelle verbe ?

— Chescun mot que, oveques temps *et* sanz case, signifie fair ou seuffre, est un verbe, sicome « je ayme ». (*ibid.*, p. 249)

続けて、動詞を人称動詞と非人称動詞に二分し、更に能動文と受動文という文構造とも関連付けて説明している。また、疑問文における動詞にも焦点を当て、例えばêtre動詞とavoir動詞が含まれている疑問文に対して、否定的に答える文の中では同じ動詞を含まなければならず、それ以外の動詞であればfaireを用いることが述べられている。

Oultre sçachéz que *quant* vous voudrés onier ce que un aultre a dit, donc il *vous* fault escouter que est son verbe, se il soit cest verbe « je suis » ou cest verbe « je ay » ou un aultre, *quelque* il soit ; car s’il soit cest verbe « je suis » ou « je ay », tu respondras *par* le mesmes verbe. Mais s’il soit un aultre verbe, donques tu respondras *par* cest verbe « je fois », « tu fois ». (*ibid.*, p. 250)

この後は先述した叙法と時制を改めて取り上げ、それぞれの活用形が例示されているが、形態的側面に限らず、例えば「je」の後に母音字で始まる語が来る場合のいわゆるエリジョン現象等、音声的側面についての言及も見出される。

3. まとめ

D.F.におけるフランス語の文法記述を考察すると、ラテン語研究の理論的枠組みが色濃く浮かび上がってくることは確かである。また、D.F.には J.-C. Chevalier (2006 : 148) が指摘するように、幾つかの格変化した形態を混同していると思われる点や、P. Swiggers (1985 : 238) が示すように、解釈に問題を生じさせるような記述が若干認められることも事実である。P. Swiggers (1985 : 238) は、不必要だと思われる文字が挿入されている語彙が幾つか見出されるとも述べているが、当時は綴字法がまだ確立していなかったことを考慮すると、避けられないことであったと思われる。

しかしながら D.F. が単なるラテン語文法を応用しただけの文法書であり、わずかな誤解を指して正当性に欠けるものだと判断することは、必ずしも妥当な評価であるとは言いがたいのではないだろうか。これまで述べてきた内容からは、D.F. の制作者が言葉の形態的な違いのみならず、音声現象や意味の相違にまで注意深く観察を行い、実例を基に分析し、そこから数多くの文法項目を整理し、分類している姿勢を十分読み取ることができる。同時に、複数のラテン語教典に認められる文法概念から当時のフランス語の記述に相応しいと思われるものを抽出し、それを適用している部分も少なからず認めることができる。このように捉えると D.F. は、当時のフランス語を文法的小および言語学的に記述した書物として積極的に評価される要素を十分兼ね備えたものであり、現存するものとしては最も古いフランス語の文法書であると十分考えられる。これは D.F. がより広く認知されるに値するものであることを同時に意味している。

本稿では D.F. の全容理解に重点を置いたため、古典期のフランス語から近・現代のフランス語に至る通時的な流れの中に位置付けながら、D.F. に記述された当時のフランス語の様相を分析、考察することができなかったが、その点は今後の課題として取り組んでいきたい。

注

¹ 正式には *Iacobi Syluii Ambiani in linguam Gallicam Isagoge, una cum eiusdem Grammatica Latino-gallica, ex Hebraeis, Graecis et Latinis auctoribus* で、仏訳は *Introduction à la langue française avec une Grammaire Latino-française inspirée des auteurs hébreux, grecs et latins par Jacques Dubois d'Amiens* である。

² Edmund Stengel (1879)、特に p. 25-33、及び P. Swiggers (1985) 参照。写本番号が 182 の 316^b-321^a であることは P. Swiggers (1985: 235) に明記されている。

³ “Johan Barton” の表記には、他にも “Jean Barton” (F. Brunot, 1996) や、“John Barton” (J.-C. Chevalier, 2006) が確認されるが、本稿では P. Swiggers (1985) に所収されている表記を基準として用いる。

⁴ 世界文学大事典、3、1997年、vol.3、集英社、p. 186

⁵ 石井正人 (1992: 207)

⁶ 例えば、Louis Holtz、2010、“*Donat et la tradition de l'enseignement grammatical, étude sur l'Ars Donati et sa diffusion (IV^e-IX^e siècle) et édition critique*”、Kazuko Tada、1986、“*L'influence des grammaires latines de l'Antiquité et du moyen-âge sur les Lays d'Amors*”、『ロマンス語研究』、19、p. 49-60、及び後藤斉、1992、「ヨーロッパ中世文法学における独創性—Razos de Trobar と Donatz Proensals—」、『東北大学文学部研究年報』、第42号、東北大学文学部、p.178-155、等。

⁷ [] 内は拙者の訳を表す。

⁸ 「フランシアン」の定義には諸説あるため、本稿では当時のパリを中心とする北仏地方で最も広く用いられていたフランス語を指して当時の「フランス語」とする。

⁹ W. Wartburg によると参照時には第10巻までが刊行されている。

¹⁰ F. Brunot (1996: 393) はこれを “*sorte de nominale*” と表現している。

¹¹ S. Lusignan (1987: 96) はこの刊行年を1383年頃と述べているが、F. Brunot (1996: 392) では14世紀前半と記されている。

¹² E. Stengel (1879)、p. 25、J.-C. Chevalier (2006)、p. 140、P. Swiggers (1985)、p. 238

¹³ Mario Roques、« Règles pratiques pour l'édition des anciens textes français et provençaux. Rapport de la 2^e commission de la Réunion des Romanistes à Paris, 18-19 décembre 1925 », *Romania*, 52, 1926, p. 243-249、及び W. Van Høecke、*L'œuvre de Baudoin de Condé et le problème de l'édition critique*, Louvain, 1970 (thèse de doctorat) に基づくとし、「*«*」の使用等は P. Swiggers による。詳細は P. Swiggers (1985: 237, 239) 参照。

- ¹⁴ 後述する2.2. 「les accidents des mots」内の最初の引用文を参照。
- ¹⁵ J.-C. Chevalier (2006)、p. 141、S. Lusignan (1987)、p. 113、P. Swiggers (1985)、p. 235
- ¹⁶ P. Swiggers (1984)、p. 184、P. Swiggers (1985)、p. 238
- ¹⁷ P. Swiggers (1984)、p. 184、P. Swiggers (1985)、p. 235
- ¹⁸ E. Stengel (1879)、p. 28

参考文献

- 石井正人、1992、「ドナートゥス文法に関する覚え書き—言語史資料としての後期古典古代における文法理論—」、『千葉大学教養部研究報告B』、第25号、千葉大学教養部、p.207-214
- 山田秀男、2003、「フランス語史」、増補改訂版、駿河台出版社（初版1994）
- Edmund Stengel, 1879, “Die ältesten Anleitungsschriften zur Erlernung der französischen Sprache”, *Zeitschrift für neufranzösische Sprache und Literatur*, vol.1, p. 1-40（特に Donait françois についての p. 25-33）
- Ferdinand Brunot, 1996, *Histoire de la langue française des origines à nos jours*, nouvelle éd., tome 1, A.Colin (1^e éd. : 1907-).
- Jean-Claude Chevalier, 2006, *Histoire de la syntaxe. Naissance de la notion de complément dans la grammaire française (1530-1750)*, Honoré Champion (1^e éd. : 1968).
- Louis Holtz, 2010, *Donat et la tradition de l’enseignement grammatical, étude sur l’Ars Donati et sa diffusion (IV^e-IX^e siècle) et édition critique*, CNRS éditions (1^e éd. : 1981).
- Pierre Swiggers, 1984, “La plus ancienne grammaire du français”, *Medioevo romanzo : rivista quadrimestrale*, vol. 9 (2), p. 183-188
- Pierre Swiggers, 1985, “Le Donait françois : La plus ancienne grammaire du français”, *Revue des langues romanes*, tome 89/2, p.235-241
- Serge Lusignan, 1987, *Parler vulgairement, les intellectuels et la langue française aux XIII^e et XIV^e siècles*, Librairie philosophique J. Vrin, Les Presses de l’Université de Montréal (1^e éd. : 1986 ; 2^e éd.)
- Walther Wartburg, 1950, *Évolution et structure de la langue française*, A. Francke S. A. (1^e éd. : 1943 ; 4^e éd.)